

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	作文の教え方について
Author(s)	エンドゥン バドルン,
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集, 1994 : 25 - 35
Issue Date	1995-03-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039358
Right	
Relation	



作文の教え方について

エンドウン・パドルン

1. はじめに

最近、日本語が著しく普及した結果、日本語を学んでいる人が多くなっている。もちろんインドネシアも例外ではない。だが、学習上いろいろな問題が出てきている。そのひとつは日本語教師問題である。

クラスで打ち明けられる悩みの中に、何か作文の教え方についての方法を紹介してほしいと頼まれるが、項目別に教えられたものはあっても、具体的な教授法はあまりない。

現在、国で、どうすればいいか、詳しく述べられたものはないので、それについて考察してみたい。従って、作文の教え方についてはいろいろな視野から考えて考察してみる。作文の書き方は日本語学習の中で必要なもので、大学を卒業して日本語教師になろうと思えば、やはり作文について学んでおくことは役に立つと思う。

日常の会話の中では、聞いていてそれほど難しいと感じないことでも、文章に書こうとすると、つい抵抗を感じる事がよくある。それは、多分、インドネシア人的なものの考え方が干渉しているからであろう。手紙などを書くとき、相手にわかるように説明的に書いたつもりでも、言葉の使い方が適切でなかったり、句読点などが不正確だったりすると、意味の通じないことがあり、作文の仕方の大切さを感じる。

2. 作文とは何か

インドネシア語の作文の要点について「Komposisi」の中から以下に少し訳してみる。

作文というのは、思想や意見などを書き表す活動である。その中に、創造的な活動がある。作文を書くときは、思想や感情や意見や幻想などを書き表わすだけではなくて、新しい考え方も見つけている。

理性的な考えと論理的な考えを使っているし、想像力も使っている。やがって、書き言葉で何か感じることを書き表す。出来上がったとき、読み手は理解することができる。

目標といえば、生活の中で役に立つことである。作文は書き手や読み手に有益である。最初読み手は、何も知らなかったが、読めばその人の知識は変わるかもしれない。利益にも段階がある。次のように、作文の役割が表わされる。

◎説明すること

このような作文の中で、書き手は読み手に説明してあげて、情報を伝えている。昔の起きたこと、未来に起きることを伝えている。それで、読み手はわかるようになる。

◎理解してもらうこと

書き手は読み手に何かを理解してもらう。それから、読み手は何かを理解できるようになる。これが、論理的な作文である。

◎描写すること

その中で、書き手は何かを描写してあげる。このような作文を読んだから、読み手は何か起きることがわかるようになる。

(2)

◎語りをしてあげること

書き手やほかの人などに起きたことを書き表す作文である。

◎命令すること

書き手は、命令や提案などをあげる作文である。読み手は命令や提案などにしたがって何かをやるようになる。

◎教えてあげること

このような作文の中で、書き手は何かを案内してあげる。やがて、読み手は何かがわかるようになる。

◎記念すること

昔の起きたことを記録する作文である。現在の人々がいつも思い出すためである。これはだいたい歴史の作文である。

◎対応すること

このような作文は、書き手は読み手とコミュニケーションを行なうような作文である。読み手が何かをやるように、書き手が書いたことである。

3. よい作文の要件

奥秋義信氏によると、よい文章の要件は次のようなことになる。

昔は「よい文章」といえば、美しい言葉を並べ立てた、上手な言い回しを使った文章と思われがちだった。「美文、達文、良い文章」などという教えが幅を利かせていた感がないでもない。

今日では、このような教えは通用しなくなってきた。良い文章であるために、「美文」である必要は全くない。文芸作品のような文章でさえ、「美文」であることよりも、目の前にずっと場面が浮かんでくるような文章、作者の気持ちがぐいぐいと伝わってくるような文章が良い文章と言われるようになる。

「達文」についてはどうだろうか。「達文」というのは本来「達意の文章」ということだから、理解しやすい文章を指しているはずである。「美文、達文、良い文章」といわれた達文のころは、(上手に表現された文章)という意味だった。今、「達文」とは、文字どおり達意の文章、わかりやすい文章を指すようになった。これから時代が求める文章作法の基本的な心構えであることをしっかりと頭に入れておかなければならない。特に、ビジネスなどの実務の現場では「分かる文章」こそ求められている。

誤解を招くような文章、それが原因となって事故やトラブルを起こすようなことがあっては迷惑以外の何物でもない。迷惑を書けない文章を書くためには、次に挙げる十の要件を守ることが必要だ。

(1) 訴えるものを持つ

文章に限らずコミュニケーションで大切な第一条件は、何を伝えたいかということをしかりと意識することである。伝えるものは何かが鮮明でなければ、内容がぼやけてしまうのは当然である。

「何を伝えたいか」は、事実でも意思でもよい。必ずしも意思つまり気持ちだけである必要はない。基本的に訴えるものを持っていない文章は、どんなに上手な言い回しが使われていて

も、そこにただ言葉の羅列によるむなしさだけが漂っている。

(2) わかりやすく書く

文章を書くということは、何を目的としているだろうか。読み手に書き手の伝えようとする内容を受け取ってもらうところにある。

難しい言葉や、もって回ったような言い回しでわかりにくい文章を書かれたのでは、読み手はかなわない。文章の基本目的は、「記録・伝達・保存」にある。

世の中には、やたら難しい文章を書いて得意になっている人がいる。読み手にとってはいい迷惑だ。かつては、難しく書かれた文章を、意味もなくありがたがある風潮もある。今日では、そのような見方をしてくれる人はいなくなった。

(3) 文脈に流れをもたせる

車に乗っても進行方向があるように、文章にも進行方向がある。目標地点をしっかりと見つめていないと、同じところをぐるぐると回り続けるような「運転」になるかもしれない。文章では、このような運転にならないよう、敵に注意しよう。

言い訳ばかりで先に進まない、「言い訳文」止め言葉をだらだらと先送りしてしまうなども、文脈に流れのある文章とは言えない。

(4) 言葉遣いや表現に品格を

書かれた文章が一見どのように上手に組み立てられていても、ちょっとした言葉の使い方や言い回しの中に人格や教養というものが現れる。これは文章技術と言うよりも、日常を生きる心構えに近いかもしれない。

(5) 文章に骨組みを作る

建物を建てる時のことを考えてみてください。設計図がなくては、建てるものはたちません。その設計図には何がかかっているだろうか。基礎と土台と構造体である。一口でいえば骨組みがかかっている。

骨組みに屋根を載せ、床を張り、壁を付け、化粧を施して出来上がる。建築物の造り方にもいろいろな工法があるが、骨組みのないものはない。

文章も同じではないだろうか。文章の骨組みを作ることを「構文」という。構文がしっかりしていなければ、のらりくらりとした、つかみどころのない文章が出来上がってしまう。たこやくらげは、つかみどころがない。”骨組み”がないからである。何か目的をもって書こうと思ったら、その目的を鮮明にとらえるとともに、これを表わすための骨組みをしっかりと頭の中に描くようにしよう。たこやくらげのような文章では困る。

構文にはいろいろな方法があるが、構文法の遊び方は好みによるものではなくて、目的によるものと理解してみよう。

(6) 裏付けを大切に

新聞記者の世界には、「頭で書くな、足で書け」「表で書くな、裏を取れ」という教えがある。新人は記者入門の第一歩として、この教訓を徹底的にたたき込まれるわけである。

「頭で書くな、足で書け」というのは、別に不作法な書き方を勧めているわけではない。勝手に推量で書いたり聞きかじりで書いたりするな、足を棒にして取材してから書きなさいということである。

「表で書くな、裏を取れ」も同じ心構えである。発表や特定個人の意見だけを基にして記事

(4)

にするのは危険を伴う。一面的な情報収集を“玄関取材”とか“表取材”といい、情報の量と質はまだ不十分なのである。数量や程度、事実などについて、裏付けの調査や聞き込みをしなければならぬ。「裏」とは「裏付け」「裏打ち」の「裏」なのである。「表」は「裏」打ちがあって、はじめて生きてくる。

(7) 人まねをしない

“人まね文”といってもピンからキリまでである。上は剽窃つまり他人の文章や文句を盗用することから、下は、言い回し案易な猿まねまでである。前者は意識的なものであり、後者は無意識によるものであるという点では共通していない。

他人の作品を剽窃すると言うのは絶対にあってはならないことであり、むしろ道義上の問題である。「よい文章を書く」という視点からは少々拡大解釈になるかもしれないが、決してしてはならない戒めとして取り上げておく。

(8) 誤解を招かないように

コミュニケーションの目的は何だろうか。伝える内容を間違いなく受け渡すことにある。文章となると、“間違いなく”伝える要求度はさらに高くなる。会話のコミュニケーションと違い、文字と記号だけが頼りになるからである。適切な用語を選び、正確な記号で書き表さなければならない。

誤解を招かないように書くというのは、このように大切なことなのである。誤解を招きやすい表現が日常生活にも数えきれない。

(9) 用字・用語を適切に使う

用字・用語に関する心得の概要である。文字の使い方・言葉の用い方は大切である。

(10) 適切なセンテンスで

“文”というものは、基本的には主語と述語とから出来上がっている。これを積み重ねていけば、“文章”になる。公式風に単純化すれば、次のようになる。

◎主語＋述語＝文

◎文＋文＝文章

◎文章＝（主語＋述語）＋（主語＋述語）．．．．．

という組み立てで成り立っていることがわかる。

文の切れ目は、必ず句点でくぎる。だから、“文”（センテンス）というのはわかりやすくいえば、「句点によって分けられた一つづきのことば」という説明もできるのである。

センテンスの長さをどのぐらいにすべきかについては、いろいろの説がある。共通していえることは「長文は悪文なり」という大原則だろう。センテンスの長い文は良くないのである。

文が長くなりすぎると、読む手の思考がまとまりにくくなり、苦勞する。わかりにくくなるわけである。なかには百字を超え、数百字に及ぶようなセンテンスも目につく。

どんなに立派な内容でまとめられていても、ただこのことだけで、“悪文”といわれてしまう。まさに「長文は悪文なり」だろう。

以上のように文章を書くときは、文章を簡単に書き、自分の言葉を使う、普通の言葉で書くことが大切なことが分かる。読み手にとってわかりやすく書いて、文章の内容が簡単なのに、文脈に流れを持たせる。料理を作るように、いろいろな材料を取って、一人の人に対してだけではなく、いろいろな人に対して文章を作ってあげる。文章では、このような手段は大切であ

る。読み手の知識はいろいろと違っているからである。

4. どうすればよい文章が書けるか、「書く」ことの難しさ

作文を書くとき、何か書きたいことがぐるぐる迷って、なかなか文章にならない。だから、何を書くかをはっきりさせる。書くことをよく分析整理する。書くことをよくみきわめたうえで正確に書き表す。書き方に工夫を加えてみがきをかける。そのうえで書いたその効果があるようにするのである。よい文章を上手に書くためには、白石大二氏によると、基本的な要件としては、次のようなことがいつも守らなければならない。

一構成

- (1) 考えが整理してある。
- (2) 内容・目的に応じた種類の文章、文体、書き方で、工夫して書いてある。
- (3) (段落) 切れ目がある。
- (4) 切れ目(段落)から切れ目(段落)への移り行きがきちんとしている。
- (5) 句読点が正しく打ってある。

一表現

- (6) 一つ一つの文の節が整っている。
- (7) 文の主語・述語が正しく照応している。
- (8) 修飾語の続き方が正しい。
- (9) それらの関係が正しくことばの上に表わされている。
- (10) 文から文への移り行きが整っている。
- (11) つなぎの言葉がうまく使っている。
- (12) 一つ一つのことばの使い方が正確である。
- (13) 敬語の使い方が適正である。
- (14) きまりきった表現はしていない。
- (15) 特に、結びなどに、とってつけたような書き方がしていない。
- (16) 表題のつけ方にも工夫がしてある。

一文字

- (17) かなづかいが正しい。
- (18) 漢字の使い方が正しい。
- (19) 送り仮名が適切である。
- (20) 字配りがうまい。
- (21) 文字がきれいに正しく書いてある。
- (22) 句読点のつけ方が適正である。

以上は、日本人の場合である。外国人、特にインドネシア人が作文を書くときは、母語的な考え方を捨てたほうがいいと思う。多くの場合、日本語の文章を書くときは、母語から日本語への翻訳文章のようになる。しかし、意味は日本人には通じない。

作文を書くことは、外国人にとって難しいことである。石田敏子氏によると、特に問題になるのは、次のような点である。

文字・表記

(6)

漢字→同音異義語、音訓の混同。字体の誤り。自国の漢字の混用。

表記→送り仮名、外来語、音声上の問題の影響を受けた誤り。句読点、各種の符号の誤用と混用。

辞書で調べた語句の誤用。

日本語の語句の母語訳を再度日本語に直すために生じるずれ。

辞書にでている語句をそのまま自分の文脈中に使用するための誤り。

副詞、指示詞の誤用。

文法

助詞の誤用。

時制の誤り→スル、シタ、シテイルの混同。

間接話法の誤り。

構文上の誤り→主語・目的語の省略のしすぎ、接続詞の誤用、文の続けすぎによる誤り、修飾語と被修飾語の位置。

自・他動詞の混同（漢字系に多い）。

不自然な表現

既習表現からの類推。

母語の表現の影響。

慣用句の不足。。

文体

書き言葉と話し言葉の混同→特に接続詞。

くだけた表現とあらたまった表現の混同。

デス・マス体とデアル体との混同。

ダ体の濫用。

その他

段落の不自然な区切り方。

長すぎる段落。

書式上の誤り→原稿用紙への記入上の誤り。

日本語の作文を書くときには、その中に文字がいろいろ混じるから、以上の注意はとても必要である。それに、文法的な知識や不自然な表現などを常に良く考えたほうが良いと思う。

5. 文を書く練習

また、石田敏子氏は「文を書く練習」を次のようにまとめている。

—初級の文章表現

文を書く練習は最初の段階から始めるほうがよい。文字の使い分けや表記法など、日本語の文字表現は複雑なので、書いて覚える習慣をつけておく必要があるからである。木村宗男氏は「文字表現の基礎的能力は、初級・中級のあいだに養っておかなければならない。口頭表現に習熟し、読解能力を持っていても、それだけでは文字表現を十分に行なうことはできない。文字によって読むばかりではなく、それを使って書くことを早くから習慣づけなければならない。」として、種々の練習例をあげている。

1. 実物・模型・絵などを示して、それを平仮名で書かせる。
2. 口頭による応答練習の答えの部分を文字で書かせる。
3. 自宅から学校への道順を図示させ、必要な目標、駅名・停留所名など文字を入れさせる。
4. 欠席、早退届けの類を文字に書いて提出させる。
5. 教科書の文の完全な写しを提出させる。
6. 空欄二文字を記入させるような問題を出す。
7. 言葉を与えて短い文章を書かせる。
8. 語句の解釈・定義を書かせる。
9. 漢字熟語複合語を書きのばさせる（例：入試終了直後＝入試が終了した直後に）。
10. 類義語を与えて文を書かせる（例：行く、歩く、捨てる、投げる、言う、話す）。
11. 数枚の絵・写真、一連の動作を見せたり、録音された音を聞かせたり、それを文で表現させる。
12. 文の前段を与えて後段を書かせる。

初級も半ばを過ぎるころになり、ある程度の語彙や文型を習得した段階で、少しずつまとまった文を書く練習に入る。例えば、「.て」の形が使えるようになったら、一日の自分の生活について書かせる。このレベルでは短い文を正しく書くことを目的とする。そのためには、教科書で扱った主題を選び、できるだけ習った語彙や文型を使って書くように指導する。

辞書の内容もこのレベルになると必要になってくるが、母語との対訳辞書を使うために辞書でみつけた意味のややずれた語をそのまま使うための誤用が起こってくる。

文章を書く力は、話す力や構文力とは必ずしも一致しない。話すのは上手なのにどういうわけか文を書かせると極く初歩的な文法上の間違いを繰り返すものもいる反面、貧しい語彙や貧しい文型を駆使して起承転結のしっかりした構成を持つ明確でおもしろい文章を書く者もいる。他のクラスではいくらかひげめを感じている学習者を作文クラスで活気づけることもできる。「文は人なり」は日本語学習途上の作文でもみられる現象である。成人であるならば、自国で文章表現の訓練を受けているはずなので、学習者の性格ばかりでなく、自国の教育的背景も影響しているのであろう。

何か手本になるような文章を示し、それを参考にして書かせる方法もある。この方法では、その文章中の表現を使ったり、やや変えたりして自分の作文を構成する学習者もいて、ある程度の練習にはなるが、やはり、究極的な目標は自分の表現を使用して書くことにあるので、あまりいつまでも続けられない方がよい。

添削はできるだけ原文を生かす方向で行なう。自然な表現と文法的正しさのどちらを優先すべきか迷う場合があるが、初級前半レベルでは、まず文法的に正しい文を示し、その次の段階で自然な表現に直す。

漫然と作文させるのではなく、何か条件をつけ目的のはっきりした作文練習をするほうが基礎的な力を養うには役に立つ。

例1：デス・マス体で書いた作文を添削後ダ・テアル体に直させる。

例2：休みの前に「休み中の計画」について書かせる。休みの後で「休み中にしたこと」を計画と関連づけて書かせ、時制に重点をおいた表現の練習をする。

例3：ある手紙を読ませ、その返事を書かせる。

(8)

例4：同じ内容の手紙を相手を変えて書かせる。例えば友人あてに書かせた手紙を添消後、友人の両親あてに書かせ、敬語の使い方の練習をする。

このレベルの作文は漢字の書き方の問題もあるので、原稿用紙に書かせる。縦書き、横書き両方の原稿用紙の使い方を教えておく。

原稿用紙の使い方

題名 長い題であれば2行目の3ますめあたりから書く。短い題であれば、紙の中央よりやや上部にくるように書く。

氏名 3行目の下のほうに書く。いちばん下は1ますあける。

本文 5行目くらいから書き始める。段落の初めは最初の1ますを必ずあける。

符号 句読点や符号「」?!々には1ますずつ使う。句読点はますの右上方に書く。

行末に来たときには、次の行の頭には打たずに行末に打つ。?や!の次には、」が来たとき以外は、1ますあける。・・・や...には、普通2ますをあてる。

繰り返し符号は「々」以外は使わないようにする。

ローマ字大文字は1ます1字、小文字は2字を入れる。

数字1ますに2字入れる。

一 中級・上級レベルの文章表現

このレベルでは、文のつなげ方の練習が第一の指導目標となる。究極的な指導目標はレポートや論文が書けるようにすることであるが、まず、明確で正しい短い文章が書けないと、試験の答案を書いたり、ちょっとしたメモを書くなど、日常生活をする上でも不便である。この練習には単語や事物の定義をさせるとよい。

また、日本語の講義のノートがとれるようにする指導も必要である。母語でとって構わないものの、それを日本語に移し替える段階でずれができ、聞き取った知識の再生が日本語では難しくなる。この点から、日本語でノートがとれる力を養っておく方が望ましい。そのためには、要約の力が必要となる。

日常生活に密着した主題について書くいわゆる「作文」の域を出て、説明文、報告文、論説文の書き方の指導に入る段階であろう。

このレベルでは、次のような問題が見られる。

(1) デス・マス体とダ・デアル体の混用。

これは混ぜないようにといくら説明してもなくなる問題の一つである。根気よく訂正するしかない。日本人の書いたものにも時折見られる問題である。

(2) ダ体の濫用

「ダ」は「デス」にたいする形として教えられるせいか、文末をすべて「ダ」で終えてしまう学習者が多い。「ダ」については諸説があるが、書き手の判断を表わし独白的な文体に用いられる思考語とされている。これに対して「デアル」は何かを説明する文体に使われ、論説文の代表的な文末表現である。

(3) 話し言葉と書き言葉の混用。

話し言葉と書き言葉の混用は初級レベルで話し言葉を学ぶこと、日常生活で話し言葉との接触の方が多きことなどによるためであろう。日本での学習者の文章表現では、接続詞の用法に最も多く現れる。

(4) 語彙・表現の選択と文体の問題

語彙や表現には、手紙のようないわゆる社交的文書に使われるもの、文学作品のような文科系の書物に使われるもの、論文のように「乾いた」文体で使われるものなどがある。このレベルの学者は、また専門書を読むにいたっていないためもあって、論文で使用される語彙や表現の知識があまりない。

(5) 引用と自分の意見の混同。

初級レベルでの間説話方の指導とも関連してくるが、どこまでが引用で、どこから自分の意見か全く分からない論文が多い。

(6) 段落の切り方に関わる問題

文章の書き方基本的知識は自国で指導を受けているはずであるが、必ずしも日本語の文章表現の技術とは一致しないらしい。段落の建て方に関する問題は以外に多く、特に主題の整理されていない長すぎる段落が目立つ。

6. 作文力における評価

日本語教授法の中で、作文力評価はいちばん難しい問題である。今まで、なかなかいい方法がまだ分からないので、これから考察をしてみたい。

評価というのは、そのなかに目的を持たなければならない。クラスで日本語を教えるから、学生の作文能力を知るためには、テストを行わなければならない。ご存じのように、日本語教育では、評価は、教育上重要な位置を占め、教師が日常直面している問題である。その原因として石田敏子氏は、「学習者の語学的、教育的背景がまちまちであること、短期間でできるだけ高い学習効果をあげるよう要求されること、そのため小テストが頻繁に行なわれること、学習者の評価に対する関心が非常に高いこと、比較的新しく開発されつつある分野であり、実証的研究を必要としていることなどがあげられる。それにも関わらず、評価法の面での対応はかなりおけている。」と述べている。

作文力テストは石田敏子氏によると、テストの一部として扱われる「作文力」は通常短文を書かせることによってとらえられている。

構文や種々表現の「かたち」に関する知識は選択式でもとらえられるが、意味上の細かいニュアンスを確実に理解して「使える」かどうかはやはりその文型なり、表現なりを使って文を作らせてみないと分からない。本人も理解していると思っているが、実際に文を作らせてみると誤解している場合は意外に多い。

目的としている構文や表現の理解に出題の主眼点があるのであれば、表記上の細かい誤りの類は訂正しても採点の対象にはしないほうがよいであろう。作文を見るか、特定の構文や表現の整理力を見るかによって、採点時の重点の置きかたも異なってくる。

作文力はある意味では、日本語力の中核をなす。話す力を優先させる教授法もあるが、話せるだけは、日本語を使って仕事はできない。特に「学生」を対象とした一般的な日本語教育であるならば、できるだけ早い時間から文による表現力を養い、テストにも出題しておくほうがよい。

以上のこと考えながら、例えばインドネシアの中級レベルの人たちに短文を書かせるテストを以下のように作ってみた。

短文を書かせるテスト：

例1：次の表現を使って文を作りなさい。

1. 決して．．．．．（でない）
2. 全然．．．．．（でない）
3. 必ずしも．．．．．（とは限らない）

例2：他の言葉で説明しなさい。

1. 突然
2. 当たり前
3. 数日後

例3：日本語で説明しなさい。

- A 1. つくえ 2. バス 3. タイプライター
- B 1. 思いがけない
2. 現金な人
3. 一目散に
- C 1. 腹が立つ
2. 目にかかる
3. 身に付ける

例4：視覚資料について叙述させる。

1. 「×××××から○○○○○までどう行ったらいいですか。次の地図を見て、説明してください。」
2. 「次の絵についてできるだけたくさん文を使ってください。」

また、石田敏子氏による長文を書かせるテストは、以下のようにまとめてある。

長文を書かせるテスト：

例1：簡単な手紙を与えてその返事を書かせる。

例2：簡単「返事」を与えて、その基になった手紙を推量して書かせる。

例3：例1、2ともに手紙の相手（目上、目下、親しい人、あったことのない人等）を変えて書き直させる。

例4：問い合わせの手紙、注文の手紙、苦情の手紙等の実用文をレベルにあわせて選び、書かせる。

例5：文章を読ませて要約させる。これは、読解力を含む点に留意する必要がある。

例6：VTRを利用してまとめた内容のものを視聴さ、それについての感想、意見を書かせたり要約させたりする。（これも聴解力を含む）

例7：幾つか題を与え、そのうちの一つについて書かせる。

例8：「話し方」のテストと同じ主題で書かせる。

例9：専門分野の書評

例10：専門分野で必要な文を書かせる。

以上は、一般的な外国語学習能力を知るようになるためであるが、具体的には教師が決める。いわゆる「作文」はテストの形態をとらず、宿題として課せられる場合が多い。しかし、一定時間を限って、辞書類持ち込み可のテストとしたほうが段階毎の作文力及びその伸びが分かり、指導上役に立つ。

7. おわりに

言語を学習するには、「聞く・話す・読む・書く」の学習ということがある。これら四つの全てのことは大切だと思うが、日本語を外国語として、文章を書くことはいちばん大切である。ということで、文章を書くことの教え方は重要になる。

しかし、作文を教える場合、教師が上手に教えられるのはまだまだ少ない。だから、日本語教師になるためには、なるべく早めに作文の教え方に関する準備はしたほうがいいと思う。

参考文献

- 石田敏子 (1992) 「入門日本語テスト法」大修館書店
- 石田敏子 (1987) 「日本語教授法」大修館書店
- 奥秋義信 (1993) 「日本語の文章術」創拓社
- 木村宗男 (1982) 「日本語教授法」凡人社
- 白石大二 (1973) 「文章辞典」帝国地行政学会
- 広田傅一郎 (1993) 「文書・書式実例集」西東社
- Gorys Krapi (出版年不明) 「KOMPOSISI」 INDONESIA